

開学十周年記念号によせて

経済学会 経済学博士 安藤 春夫
運営委員長

学校法人千葉敬愛学園は、二つの高等学校と二つの短期大学(昼夜)とを経営してきたが、さらに昭和41年4月に千葉敬愛経済大学を設置し本年はその創立十周年にあたる。

新制大学といえども学問の最高の府であることはいうまでもないが、学究者である教師も学生も、ともに社会人であるという自覚のもとに社会人としての名にふさわしい思惟の涵養と、人格ないし人間性の陶冶とに努めることもまた強く要請される。もっとも学究と人格形成の両者を同時になしとげることは、まことに至難の業にちがいないが、幾分でもこれに接近する方法として、創立の当初においてわが教授会は、四ヶ年を通じての必修ゼミナール制を設け、これを中軸とし、組分けによって聴講学生数の少ない語学・外書講読・体育実技など、教師と学生との直接接点の多い科目にその補成的機能をもたせるという組織を定め、専任教師の全員がゼミナールの指導を分担して現在にいたった。この制度が本学における特色の一つといえるであろう。

他方において大学は学問研究の天与の道場であるという信念にもとづき、開学匆忙のさ中に、種々の困難なる事情を排除して、専任教師と学生とを会員とする千葉敬愛経済大学経済学会を設けることができた。経済学会は、会員の研究業績の一部を報告討論する研究会をししば開催したほか、機関誌として「研究論集」を発刊し、全国各大学

の機関誌との交換を行ない、これを会員の好個の研究資料として整備している。この研究論集の第1号が発刊されたのは、昭和43年秋であった。爾来、年々発刊を重ねていまや第9号となったが、時あたかも本学創設十周年にあたるので、経済学会はその記念事業の一環として本号をもって開学十周年記念号として編輯することになった。

惟うに近来世上騒然たる中に、また新制大学の存在価値や大学における学問の社会的価値が世評にのぼるなかにあって、本学が開学十年足らずして発展の一路を驀進しうるにいたったことは、法人理事をはじめ教職員および学生がうって一丸となって一致協力したたまものであることを、あらためて認識したい。同時にわが経済学会々員が、これまで通り学問意識に情熱をかたむけてこの記念号に進んで優秀なる研究論文を投稿されたことに、深甚の敬意を捧げさせていただきたい。擱筆するにあたり、これまで多年にわたって研究論集の企画編輯に献身された経済学会運営委員の方々に対し、衷心より深謝の意を表する。（昭和50年4月20日）